

伊能忠敬より42年も前に

# 日本地図を作った男

## 長久保赤水を語る

佐川 春久

長久保赤水の日本地図「改正日本輿地路程全図(通称・赤水図)」は、世界六カ国の図書館や博物館などで、計四十四枚が貴重なコレクションなどとして大切に保管・管理されていることが分かっている。

赤水が生まれ育った常陸国赤浜村(現在の茨城県高萩市)で二十年余の歳月をかけ、製作された赤水図は、日本人ばかりでなく、江戸時代に日本へ渡来した外国人から実用的な地図として歓迎され、ひそかに国外へ持ち出されたのだ。

江戸時代に長崎へ来航し、日

本研究者としても著名なドイツ人医師シーボルトも、赤水図を持ち帰ったという。

それらの一部が現存しているのは、世界各地で江戸時代の日本を知る貴重な情報として使用された証しである。

「日本が国を閉ざした江戸時代に、赤水の地図が世界で高い評価を受けた事実を忘れてはいけない。世界に通用する業績を残したといえる。その意味で、赤水は江戸時代の国際人であった」

世界に広がった赤水図を最初に確認して公表した、東京大元



① JR高萩駅前に鎮座する長久保赤水像  
② 同駅前には赤水図の陶製プレートも設置されている。いずれも茨城県高萩市で



# 世界が業績認めた国際人

教授の馬場章さんは、こう強調する。

赤水図は明治維新以降も、極彩色の美しさから、欧米の美術収集家に買い求められた。

馬場さんは「日本では(水戸藩二代藩主で水戸黄門としても知られる)徳川光圀は、とても有名だが、ヨーロッパで彼の名が周知されているとは思えない。しかし長久保赤水の名は、海外の書物にも紹介されている。このことから、いま一度、赤水の国際人としての業績を考え直してみる必要がある」と言葉を重ねた。

馬場さんの調査などにより、明らかになった海外の赤水図を、枚数の多い順に紹介してみたい。オランダで十四枚、米国で十枚、カナダで八枚、フランスで七枚、英国では三枚、ドイツでは二枚を確認。ドイツ・ミュンヘン国立民族学博物館の一枚が、馬場さんの最初の発見であった。

ドイツ・ルール大の保管物は、シーボルトが赤水図から作った地名辞典で、赤水図が地理・地図情報としてだけでなく、日本の地名に関わる情報を理解したり収集したりするために使われていたことがうかがえる。

ちなみに赤水図の地名数は初

版で約四千二百、二版で三割増しとなる約六千が記載されている。

さらに近年、ロシアでも新たに赤水図が見つかった。ロシア特使レザノフが日本滞在中に入手して持ち帰り、一八〇九年と翌一〇年にロシア語訳の赤水図として、ロシアで発行されている。この地図は、赤水図の初版には記載のない海路が示されていることから、二版であることが知られる。異国語に翻訳された希少品としても、今後評価を高めそうだ。

一方、国内では赤水の知名度が子どもたちの間でも上がりつつある。

関連資料の国重要文化財指定(二〇二〇年)に伴い、昨年度から帝国書院の教科書「中学校社会科地図」に長久保赤水の名前と『改正日本輿地路程全図』が伊能図と並べて掲載された。

この教科書には「赤水図 江戸時代に長久保赤水が作った地図です。写真の伊能図より約四十年早くつくられました。伊能図は幕府が一般に公開しなかったため、一般の人はこの地図を頼りにしました」と紹介されている。

(さがわ・はるひさ)長久保赤水顕彰会会長